

ギルミティヤから二重に追放された人々へ：ブリジ・ラルの研究動向と生涯の覚書

著者	丹羽 典生
雑誌名	民俗文化研究
巻	9
ページ	42-57
発行年	2008-08-25
URL	http://hdl.handle.net/10502/4347

〔論文〕

ギルミティヤから二重に追放された人々へ

——ブリジ・ラルの研究動向と生涯の覚書——

丹羽典生

一 はじめに

ある人間は、どのような経路をたどり研究者となり、それぞれの研究対象と出会うのであろうか。研究主体と研究対象の関係は、必然に思える場合もあれば、あくまで恣意的な、偶発的なものにみえる場合もある。人類学史や植民地研究などの知識と学問の相関関係についての研究が盛んになった結果明らかにされたことのひとつに、いずれにせよ両者の関係は各人の置かれたある歴史過程と地域的文脈の組み合わせの産物としてあるというある意味で平板な事実である。しかし、これは何も単純な知の社会還元論を意味するわけではない。各人や各知識が歴史的な文脈に依存しているという意味において還元論には妥当性は疑うべくもないが、こうした文脈自体を革新し、時代の制約を突き破る研究もまたそうしたなかから生み出されることが分かってきたからである。以上の問題意識のもと、本稿では、特定の研究者に着目して、研究業績をその人と生まれた土地の歴史に重ね合わせる分析を行っていきたい。この分析は、学問が細分化しつつある現在の研究状況において、その人の業績をある学問分野の学説史という枠に切り詰めることなく読むために必須の作業ともいえよう。

事例として、本稿では、現在のオセアニア歴史学を代表する人物の一人であるブリジ・ヴィラシュ・ラル (Brij Vilash Lal) の生涯とその研究の変遷を取り上げて、考察していきたい。2006年に刊行されたインディアン・ディアスポラに関する百科事典『インディアン・ディアスポラ百科事典』[Lal 2006b] は、本論の対象であるブリジ・ラルの関わったインド人移民研究の最新成果である。ラル自身20世紀初頭におけるインディアン・ディアスポラの誕生と

いう歴史的背景のなかから生みだされた人物であるが、この著作が生み出されるに至るまでの彼の研究歴のなかにこの著作を位置づけてみると、インド人移民の末裔がインディアン・ディアスポラの研究を総括したという以上の射程を有していることが分かる。しかしながら、彼の研究領域はあまりに多岐にわたり、著作も膨大な数に上るため、彼の業績の全体像についてまだ十分に整理されているとは言い難い。

そこで、本稿では、彼のこれまでの生涯と研究成果の関係を通時的に検討することを通じて、歴史学、オセアニア地域研究、インド人移民研究という専門分野の枠にとらわれることなく、彼の研究の全体像を理解し、多岐にわたる業績を繙く一助となることを目的としたい。次章では、ラールが研究者となるまでの背景を、三章では研究あるいは参画する対象の変化について整理する。最後の章では、彼の研究のこれからの展望について指摘したい。

二 研究者への道

ブリジ・ラールは、1952年、南太平洋に位置するフィジー諸島のヴァヌアレヴ (Vanualevu) 島タンビア (Tabia) の小村で生まれた。フィジーにおける典型的なサトウキビ栽培の農村地帯で幼少時を過ごした彼は、「黒い海」⁽¹⁾を越え南海の小島フィジーに足を踏み入れたインド人契約労働者移民——後にギルミティヤ (girmitiya) と自称することになる——の第三世代に当たる。ギルミティヤとは英語の契約 (agreement) に当たる言葉が、ヒンディ語風に転訛した言葉である。祖父の代には異国であった南太平洋の地を母国として生まれたラールのアイデンティティのねじれは、こうした歴史的背景のなかで生み出された。そして、このねじれこそが後の彼の生涯と研究の双方に色濃く影を落とすことになった。

ラールの原風景には、幼少時、ギルミティヤ第一世代であった祖父の姿があった。祖父が息を引き取った際にも彼と床を同じくしていたほど、ラールはおじいちゃん子として育ったという。しかし、1906年にフィジーの地に足を踏み入れた祖父は、移民三世代目に当たるラールにとってはすでにエキゾチックな存在であった。ターバンとドーティ (dhoti) をまとい、フッカ (hukka) を吸い、

バージョン (bhajan) を謡い、なじみのない言葉話す。そうした祖父の存在に魅せられていたという [Lal 1997: 17, 2001a: 1-2]。

学校教育を受ける年齢になると、そこで優れた成績を収めたラールは、時代の変化にも助けられて高等教育を受けることができた。実際、彼は高等教育をフィジー国内で受けることが比較的容易になった最初の世代のインド人に当たり、ヴァヌアレヴ島の都市ランバサ (Labasa) に位置するランバサ高校に進学した [Lal 2001a: 64]。

また、当時のフィジーにおいて、現在ほど高等教育を受けた人材を受け入れる職の受け皿が少なかったこともあってか、当時ヴァヌアレヴ島に唯一存在したこの高等学校には、のちに各分野の専門職に就くほどの能力を備えた優れた教師がそろっていた。たとえば、後に組合活動家としてフィジー労働党の創設メンバーとなるクリシュナ・ダット (Krishna Datt)⁽²⁾ のほかにも、後に南太平洋大学 (University of the South Pacific) の文学研究者としてのみならず、実作者としてフィジー・バート (Fiji Baht)⁽³⁾ と呼ばれるフィジー生まれの独特なヒンディ語で小説を紡ぐことになるサブラマニ (Subramani)⁽⁴⁾、詩人で、オーストラリア、マードック大学の比較文学教授となるヴィジャイ・ミシュラ (Vijay Mishra)⁽⁵⁾ などがいた [Lal 2001a: 63-64, 67-68]。

高校で優秀な成績を修めたラールは、貧しい生活環境であったにもかかわらず入学試験を通過して奨学金取得に成功したため、1971年には、その3年前に設立されたばかりの南太平洋大学へ進学することになる。1970年にフィジーは独立を迎えていたため、ラールは植民地時代の教育を受けた最後の世代であると同時に、南太平洋のローカルな大学で教育を受けた最初の世代でもあった。別言すれば、この時代に南太平洋大学で教育を受けた者の一人として、独立後の国家を担うことになる人々に囲まれて教育を受けたという側面があったと思われる。太平洋地域の総合大学であることを理念とする南太平洋大学という場で、彼はまさに南太平洋地域各地の国家を担うような人々と交わる経験をもち得たといえよう。一方で、研究としては、歴史研究、ことにインド・フィジー人に関わる研究に開眼したのもこの時期であった。大学進学率のさほど高くない当時のフィジーにおいて、貧しい生まれであった彼が、法学などではなく、

実利的な職に就ける見通しの少ない歴史学という学問分野を専攻することは、それ自体実存的な選択を迫るようなものであったらしい⁽⁶⁾ [Lal 2001: 63-64, 67-68]。

しかし彼の歴史家としての才能は、ルールを南太平洋大学の学士号で終わらせることはなかった。彼はブリティッシュ・コロンビア大学でカナダ、バンクーバーにおけるシク教徒を題材とする修士号を取得した後 [cf. Lal 1981]、オーストラリア国立大学で博士課程に進学することとなった。博士課程での彼の研究テーマは、祖父への記憶、彼の出自に関わるギルミティヤの歴史についてであった。歴史人口学に興味を持ち、研究手法としての統計学について関心を抱いていたルールであるが、数学の知識が充分ではなく、また適切な指導教育も見つからなかったため、歴史学科のケネス・ギリオン (Kenneth Gillion) に受け入れられることとなった⁽⁷⁾。フィジーのギルミティヤの歴史について篤実な研究を残していたギリオンと博論の内容についての相談を経て、ルールは、より広くギルミティヤの出身地など背景に関する研究に携わることを決意した。こうした生み出されたのが、1981年の博士論文に結実することになる画期的なギルミティヤ研究であった⁽⁸⁾。

彼の博士論文は、「あらたな奴隷制としての契約移民労働」観に縛られていた従来のインド人の労働交易史を見直し、歴史を形成する上での個々のエイジェンシーにより焦点をあてたものであった。その意味で、キャンベラ学派と呼ばれることもあるオーストラリア国立大学の諸島民中心的な視点から西洋との接触の歴史を記述・分析していく歴史学の手法を受け継ぐものであったともいえよう [Munro 2000]⁽⁹⁾。ただし彼の論文のもっとも斬新な点は、統計を駆使した研究手法にあった。彼は、カルカッタ (現コルカタ) から出発した北インド人移民の旅券を統計処理して、それまで曖昧なままにされていた、移民に関する出身階層、カースト、出身地、ジェンダーなど社会的背景の構成を明らかにした⁽¹⁰⁾。

また、指摘しておくべき点として、ルールがこの仕事に取り組んでいる時期は、ちょうどフィジーにおいてインド人移民が到着してから100年の区切りを迎える、ギルミティヤ100周年の時期であったという点である⁽¹¹⁾。そのような

時期に、博士論文にまとまる重厚な歴史研究に付随して、彼は祖父の生まれた村落にまで足を運びおよそ6ヶ月にわたるフィールドワークも行っている。この成果は後にエッセイの形でまとめられた [Lal 2000, 2003:44]。ラールの研究の進展は、フィジーのインド人のあいだでギルミティヤとしての歴史意識が高揚していった時代背景と歩をいつにしていたといえよう。

三 南太平洋現代史研究と現実の政治的問題への介入

博士論文上梓後の彼は、引き続きギルミティヤ研究を深化させていくだけでなく、現代のフィジーに関する政治的展開も積極的に分析するようになった。彼の現代政治に対する取り組みは、フィジーの1982年総選挙についての論文を皮切りに以降陸続と公表されている [Lal 1983]。ラールはしばらくフィジーにおいて研究を続けていたが、研究世界の中心から離れた南太平洋大学の研究環境に飽きたらず、ハワイ大学へと活動の場を移した。

ハワイ大学においては、プランテーション労働者の実践に焦点を当てた論集 [Lal, Munro and Beechert 1993]⁽¹²⁾、また、政党政治の成立などフィジーの現代史により照準を合わせた論集 [Lal 1986] を矢継ぎ早に上梓している。そうしたなか、1987年に起きた南太平洋地域で最初となるクーデタが、フィジーの歴史のみならず、彼の研究にとっても分岐点となった。

彼の生まれ育った地で起きたクーデタという政治的問題が彼に衝撃を与えたことは想像に難くない。実際、クーデタ発生の翌年には、クーデタの展開から背景に至るまで明快に分析したモノグラフを数週間で書き上げ、出版している。同時に、フィジー出身という個人的理由以外にも、フィジーの政治的状況に対する彼の見解が同僚に理解されないことに対する苛立ちもあったという。たとえば、ハワイ大学で教鞭を執っていた太平洋地域研究者たちの多くが、フィジーのクーデタをオーストラリア、ニュージーランドや、ハワイの先住民問題の枠組みを参照しつつ、先住民（フィジー人）と移民集団（ラール自身の含まれる）の民族間対立として理解する傾向が強かったため孤立感を味わったという [Lal 2001:124]⁽¹³⁾。実際、フィジーの先住民の置かれた状況は先述の国々と異なっており、植民地時代においても先住民として特別な地位を与えられ、制

度上も優遇されていた。さらに、土地所有権も喪失することなく、1970年の独立の時点でもフィジー全土の83%以上の土地はフィジー人が所有していたのである。いわゆる先住民問題の枠組みでフィジーの問題を取り上げることの問題点はあきらかであろう。ラール自身はクーデタの問題を民族対立に還元するのではなく、民族を横断する経済格差の問題、各民族内部に存在する差異にも配慮する、よりニュアンスにとんだ解釈をしていた [Lal 1988]。

こうした同時代的な出来事への応接や、ハワイ大学というアメリカにおける太平洋地域研究の拠点に在籍したという経験を通じて、彼の研究の重点も若干変化していった。具体的には、20世紀という彼の存在を生み出し、現実に行き続けている時代にさらにいっそうの関心が向けられていくようになったのである。たとえば彼は、斯界に画期をなす20世紀フィジーの歴史書を上梓しているし [Lal 1992]、1989年に刊行が始まる研究雑誌『現代の太平洋 (*The Contemporary Pacific*)』の創刊に関わるなど、ひろく南太平洋地域の現在を視野に入れた研究領域を開拓していくことになる⁽¹⁴⁾。ことに、ラール自身業績として自負する新雑誌の創刊は、これまで太平洋社会の現代的動向である選挙などのトピックが、『太平洋歴史学雑誌 (*Journal of Pacific History*)』などの歴史研究向け専門誌の片隅に設けられた「太平洋における最近の動向」欄に紹介されるに留まっていた学問的現状に対する彼なりの批判の意識が込められていたのかもしれない。ともあれ結果として、フィジーのクーデタは、ラールのみならず太平洋諸島に関心を持つ歴史家に、19世紀史から20世紀史へと焦点を移させ、ますます現代的課題に取り組ませる直接の契機となった [Lal and Munro 2006d: 3-4]。ハワイ大学での研究生活を通じて培われた広い知見・人脈は、太平洋地域に関する包括的な百科事典を編纂する際に生かされている [Lal and Fortune 2000]。

以上述べてきた孤立感のほか、家族の問題、生まれ育った英領とアメリカ合衆国ハワイ州との文化的な違いなどさまざまな要因が重なることで⁽¹⁵⁾、ラールはハワイを後にして、オーストラリア国立大学に活動の場を移すことを決意する。学生時代を過ごしたオーストラリア国立大学に研究者として復帰したラールは、これまでの選挙に関する分析やクーデタに関する応接などをつうじて培

われてきた現実政治への関心をさらに積極的に押し進めた。もはや彼の関心は、通常、歴史家として想像されるような書齋や古文書館のなかに収まるのものではなかった。これはおそらく彼が、フィジーの地に研究対象として以上の関心を抱いていたという理由のほかに⁽¹⁶⁾、フィジーという小国で政治的混乱の巻き起こる時代に高い教育歴を誇る知識人として居合わせたという歴史の偶然から、政治的状況に対してより具体的な参画を余儀なくされていくことになったといえよう。

具体的には、当時、フィジーにおいて起きていた憲法改正問題に関して、彼自身改正作業に関与していくことになった。背景を説明すると、1987年クーデタの結果、国内のフィジー人民族主義者の主張を受け入れて制定された1990年憲法には、フィジー人以外の民族に対する差別的な条項が含まれていた⁽¹⁷⁾。そのため、フィジーは、国際社会に受け入れられているとはほど遠く、政治的、経済的な苦境から立ち直るためには憲法改正が必要であることがフィジー各界から叫ばれていた。そうしたなか設置された憲法検討委員会の代表3人のうちインド人を代表する人物として、ラールは任命された⁽¹⁸⁾。諮問作業は1995年から開始され、各種の政党や労働組合、非営利団体から一般の人々に至るまで、フィジー各地を巡回して行われた。同委員会の活動は、1996年の答申書に結実している [Reeves, Vakatora and Lal 1996 ; Lal 1998a : 57-67]。

ただしラールの行動の特色は政治的参画にたんに傾斜するのではなく、研究と実践のバランスを保っていることにある。実際、この時期には、憲法検討委員会参加と並行して、その副産物として、上記の憲法改定作業において専門家の参考意見としてよせられた各種の論考をまとめた2巻本のほか、同委員会の活動の記録を出版している [Lal 1998a]。また、1960年代に活躍したインド人の政治家A.D.パテル (Patel) の伝記を著し、現代のフィジーの問題にも通じる彼の政治的洞察力の再評価を行う仕事を残している [Lal 1997b]⁽¹⁹⁾。

結果として研究と実践の二足のわらじは、彼の研究視野を広げることに役立ち、比較憲法学の著作も生みだしている [Lal 1997a]。この憲法検討委員会の活動以降、ラールは事実上、フィジーにおけるインド人コミュニティの代表的知識人としての役割も担っていくことになり⁽²⁰⁾、フィジーの政治問題に関

する彼の時事的なコメントは、毎日のようにフィジーの主要メディアをにぎわしていくこととなる。

四 二重の追放へ

以上、ラールの研究業績について時代に沿って記述・分析してきて明らかにするのは、研究対象との密接な関係であろう。ギルミティヤ移民の末裔としての研究は、19世紀に生を受けた祖父らギルミティヤという「集合的自伝」⁽²¹⁾の研究であった。その後、時代の趨勢もあってフィジーを中心とするオセアニア諸社会の現代政治に対する研究・関与へと移行していったが、その後に着手した新しい研究もみずからの生を受けた土地に対する関心と不可分であった。その意味で、彼の研究には、フィジーという太平洋社会にうまれたインド人という、まさにインド・フィジー人としてのアイデンティティとの関係を一貫して見て取ることができる⁽²²⁾。

その一方で、近年の彼の研究スタンスには、若干の変化が見て取れる。現代政治については相変わらず旺盛な執筆活動をおこなっている一方で [Lal 2006 a]、ギルミティヤ研究からは事実上すでに手を引いている⁽²³⁾。本章では、こうした彼の研究における最新の取り組みを紹介することで本稿を閉じたい。

近年の作品の際だつ特徴としてまず指摘されるべきは、フィクションを交えた執筆活動に取り組んでいる点であろう。文学というジャンルにそもそも愛着を持っていたと語っているラールであるが [Munro 1997:17]、実証史家という制約から若干距離を置いて、創造的な要素を含めて歴史を書くという着想を得たのは、彼が博士論文に取りかかっていた1970年代後半にインドでフィールドワークを行った経験からきているという。祖先の地であり、いまでも重要な文化的参照点としてありつづけるインドでの滞在は、同時に自己の価値観や外観がいかにインド人らしくないかを認識する経験でもあったという。つまり、ゆがみをはらんだ自己を形成した背景を理解するための創作活動であったのである [Lal 2003:44]。

彼自身そうした著作を刊行しているのみならず、オーストラリア国立大学で『コンヴァェーションズ (Conversations)』という創作に関わる雑誌の創刊メン

バーとなっている。言語的にも、英語に縛られることなく、彼の母語であったフィジー・パートを使用して創作する試みを行っている [Lal 2004: 389-403]。文字史料の検討を経て過去を再構成するだけでなく、フィクションという表現方法を援用することによって、歴史家としての専門の限界を超えた事象にも迫ろうとしているのである。ルール自身、この仕事を、事実 (fact) とフィクション (fiction) のはざまを扱う「ファクション (faction)」であり、ファクションとは、「疑似フィクション的 (quasi-fictional) な手法を通じて表現される、生きられた、事実に基づく経験」であると定義している⁽²⁴⁾ [Lal 2003: 45; cf. Lal 2008b]。ことに作者の記憶と創作的想像を交えた作品集『タルシ氏のストア』 [Lal 2001a] は、2002年キリヤマ文学賞 (Kiryama Prize) の受賞作品となっている⁽²⁵⁾。最新作の『ターニングス』では、より積極的にフィジー・パートを交えた作品づくりがなされている [Lal 2008b]。

ルールの創作活動に関して興味深い点は、このあらたな試みが何も、彼個人の興味関心のみから生み出されたわけでもなければ、歴史家としての手法の限界を超える実験的な試みから生み出されたわけでは必ずしもないという点にある。『タルシ氏のストア』を念頭に置いてルールが説明するところによると、ファクションは「ばらばらとなって、世界各地に散らばったインド・フィジー人のいまの世代を彼らの歴史的・文化的ルーツに繋ぎとめるための試み」であるという [Lal 2003: 46]。こうした観点から現在のルールの研究をとらえ返してみると、ルールのインド移民研究という主題が完全に終了したかというところではなく、むしろ、ディアスポラの未来を見据えながらインド移民研究と関わりを持っているというべきであろう。

その成果の一端が、冒頭で掲げた、インド人移民の比較研究であり、二重の追放論 (twice displaced) である。二重の追放論とは、当初植民地主義政策のもと本国を後にして移民労働者となっていた人々、ことにその子孫が、現在、最初の移住先から別天地へと再度移動している状況を指している言葉である [ラル 2005: 42-47]。

こうした研究関心の変化は、やはり、生活の拠点がオーストラリアになってから長い時間が経過しているという彼自身を取り巻く環境の移り変わりが背景

にあらう。同時に、この変化は、ラール個人に限定される現象ではなく、フィジーにおける政治的混乱の帰結として、彼を含めたフィジー・インド人の多くがフィジーから離れ、別の土地へ移動を行っているという現実の動向とも関係があらう。しばしば指摘されるように、フィジーにギルミティヤで足を踏み入れたインド人の総数が約6万人であったとすると、1987年のクーデタ以降、いまやその倍の1万2千人を上回るインド人がフィジーを後にしているのだ。以上の数字はフィジーの例であるが、植地的な状況で培われた世界各地のインド人コミュニティは、世界のグローバル化の趨勢と合わせて、二重の追放という事態に直面しつつあるといえる。

19世紀に生を受けた祖父の世代の歴史的研究から研究者としての道を歩み始めたラールは、研究者としての旅路を重ねるうちに、現代の政治的動向に関与しつつ研究するようになった。そうした研究の果てには、自身の属するインド人移民の末裔と歩調を合わせるようにして、彼はさらに第二の船出に向かっていくのかもしれない⁽²⁶⁾。『インディアン・ディアスポラ百科事典』におけるフィジーの項目は、『「移入から移出へ」——このことばが、早晚、フィジーのインド・フィジー人コミュニティの墓碑銘となるかもしれない』と締めくくられている [Lal 2006b: 382]。ラールはかつて、自分が着手している研究を、「自分自身を理解するための探索」 [Lal 1997] であると断じたことがある。この言葉を左記の辞典の文末の言葉と重ね合わせてみたとき、ラールの研究自体も新たな船出に漕ぎ出したことを、読者は期してもいいのかもしれない。

注

- (1) カーラー・パーニー (kala pani) とヒンディ語で呼ばれる。研究者のあいだでは、故地を離れることによるカーストの喪失や、汚れた「野蛮人」との接触に対する警戒心から、インド人は海外渡航を恐れているという説が流布していた。しかし現在この説には、過度の誇張があるとされている [Lal 2000]。
- (2) ラールは、授業の時にダットが共産党宣言の一節がかかれたプレートを首に掛けて教室に入ってきた姿を回想している [Lal 2001a: 75]。
- (3) インド各地の人々が集められたプランテーションでの労働の経験から生み出されたフィジー・ヒンディ語である。独自の語彙や文法的特徴を備えている [Moag

- 1977]。ルール自身、ギルミティヤという歴史の産物であると同時に、自己のアイデンティティを形成しているフィジー・バートがフィジー・インド人社会のなかでもっと尊重されてしかるべきであると自説を述べている [Lal 2005b]。
- (4) 物語の主人公がフィジー・ラル (Fiji Lal) という名前なのも何とも暗号的である。また、ルール自身、この小説を高く評価している。サブ라마ニはディアスポラを主題にした評論をいくつかものしている [Subramani 1979]。
 - (5) 彼のギルミティヤ論としては、『ラーマの追放』などがある [Mishra 1979]。
 - (6) また、将来の結婚相手となるパドマ (Padma) ともこの頃知り合っている。パドマ・ルールは天然資源や環境の経営、農業問題などを専門とする研究者である。彼女はグジャラーティ移民の第二世代に当たり、フィジーで著名な経済学者で新聞コラムニストでもあるワダン・ナーセイ (Waden Narsey) の妹でもある。
 - (7) 公式的な指導教官は南アジア研究で著名なアンソニー・ロウ (Anthony Low) である。彼の著作の献辞に掲げられた大学院生の名前のなかに、イムラン・アリ (Imran Ali)、スティーヴン・ヘニングガム (Stephen Henningham)、アンドリュー・メジャー (Andrew Major)、ディペシュ・チャクラバルティ (Dipesh Chakrabarty) と並ぶ「セポイ (Sepoys)」として、ルールは登場している [Munro 2000: 2]。ルールはギリオンの研究に関しても、敬意をもった批評を行っている [Lal 2006d]。また、彼の逝去に際しては、彼との思い出を交えた追悼文も書いている [Lal 1993]。
 - (8) 博論の主題として当初フィジーにおけるシク教徒について研究するようギリオンから示唆されたというが、関心を持たなかったため、ギルミティヤの背景に関する研究に切り替えたという。
 - (9) ラール自身、諸島民中心史観の典型的な研究とされることもある歴史家ピーター・コリス (Peter Corris) のソロモン諸島移民交易史に関する研究に感銘を受けたと述べている。ただし同時に、キャンベラ学派の研究を特別に意識したわけではないと語っている [Munro 1997, 2000]。
 - (10) ただしこうした統計的データ及び統計を使用することに関する議論は、著作からは割愛されている [e.g. Lal 1983a]。
 - (11) 100周年を記念して刊行された書物にルール自身も寄稿している [Mishra 1979; Subramani 1979]。寄稿した論集の編者は彼の高校時代の恩師であることも興味深い。
 - (12) 切り口として、女性の処遇や自殺のトピックに焦点を当てている [Lal 2000b]。
 - (13) ケーデータに関するこのモノグラフ [Lal 1988] について、研究者による現実の問題への関与という視点から、彼自身批判的に読み直している [Lal 2001b]。
 - (14) フィジーに関する通史 [Scarr 1984] を残している、もう一人の著名な歴史家に、

デリック・スカー (Deryck Scarr) がいる。彼は先住系フィジー人の保護政策に取り組んだ植民地総督の伝記 [Scarr 1978] や、フィジー人の伝説的な首長の伝記 [Scarr 1980] で定評のある仕事を残している。また、1987年のクーデタにおけるフィジー人の立場を擁護する著作も書いている [Scarr 1988]。歴史研究と同時代の分析という研究関心はルールと共通するものの、フィジー人保守層に近い研究素材の選択やクーデタに対する解釈などの点で、スカーはルールとまったく異なる立場である。スカーとルールの研究内容の比較は、異文化研究のあり方を考察する際に、興味深いテーマたり得るであろう。

- (15) たとえば、アメリカでは家族がヴィザを取得することに手間がかかる問題があり、彼の趣味のリストになかった野球が盛んであった一方で、オーストラリアではヴィザの取得も比較的楽で、ラグビー、クリケットなど彼にもなじみのある娯楽が日常的なものとなっていたことを指摘している。
- (16) ルールは、もともと、研究と実践の兼ね合いに興味を抱いていた [Lal 2001a: 123-124]。別の著作の中で、彼は研究スタイルについて、「冷静に距離を置くことではなく、批判的に密着すること」と表現している [Lal 1992: xvii]。
- (17) たとえば、首相就任者の規定にフィジー人であることという民族的属性が付与されたこと、上院の議席においてもフィジー人が全体の過半数をつねに占めるよう配分されていた点が指摘できる。
- (18) 残りの二人は、マオリ出自で、前ニュージーランド総督、大司教でもあったポール・リーヴス卿 (Sir Paul Reeves) と、衆議院議長も務めたフィジー人トマシ・ヴァカトラ (Tomasi Vakatora) である。
- (19) 本書の中で取り上げられているパテールの見解の多くは、選挙制度などルールの政治的見解と一致している点が多い。歴史家としてパテールの果たした役割に比して、彼の業績が低評価であることも問題視していたルールは [Munro 1997]、彼の伝記を書く作業を通じて、自己と彼の姿を重ね合わせることがあったのかもしれない。パテールの伝記執筆に取りかかったのは、ハワイ大学に異動する以前のことであった [Lal 2008c]。
- (20) ギルミティヤ125周年祭において刊行された本においては、中心的な寄稿者、編者となっている [Lal 2004]。
- (21) ダグ・ムンローとのインタビュー記事におけるルールの言葉 [Munro 1997]。
- (22) 彼自身、自己を形成したのものとして、南アジア (食事や食習慣、宗教的精神的伝統、審美的側面)、西洋 (職場や公的言説における言語、教育システム、法の伝統、個人や人権の感覚)、オセアニア (風土の感覚、ユーモアのセンス、人生に対するリラックスした態度) の3文化の影響を指摘している [Lal 2008b: 197-198]。
- (23) その意味で、ギルミティヤ関連の論文をまとめた最後の著作のタイトルは象徴的

である。「チャーロー、ジャハージー」とは、ヒンディ語で「動きだそう、船仲間たち」という意味がある。船仲間は、インドからフィジーへと移動する際、同じ船に乗り合わせた人々を指す。彼らは長い航海をともにすることを通じて、特別な関係を築いていたとされる。

- (24) ラール自身、この造語に愛着を持っているようである。たとえば、本稿執筆時点での彼の手による最新の著作においても、フィルム、フィクション、歴史に並んで「ファクション」が、太平洋の人々の生活が読み解かれ、構築される媒体のひとつとして指摘されている [e.g. Lal and Lecke 2008: vii]。
- (25) ラールはまた、インドの版元から『真夜中の裏側で』という作品集も刊行している [Lal 2005a]。副題には『タルシ氏のストア』と同じ「フィジーの旅から」が付されており、双方の内容も重複が多い。この著作のタイトルは、インドの独立と時を同じくして生まれた人々を題材に、彼らとインドという国の成長を重ねて描く『真夜中の子供たち』を意識したものであろう。『真夜中の子供たち』の著者であるサルマン・ラシュディ (Salman Rushdie) もインド生まれながら、現在イギリスで生活しているという意味で、新たなインディアン・ディアスポラの一員である。また、『タルシ氏のストア』というタイトルは、ナイポールの著作『ビスワス氏の家 (House for Mr. Biswas)』のなかに出てくるタルシを連想させもする。ナイポールもトリニダート生まれのインディアン・ディアスポラの一員であり、2001年のノーベル文学賞を受賞した高名な小説家である。ラールはしばしば彼の著作からの引用を行っている。
- (26) ここで指摘した研究以外にも、まだ公刊されていないが、英国植民地時代の教育、ことに試験制度に焦点を合わせた研究や、ジャイ・ラーム・レディー (Jai Ram Reddy) の伝記を執筆しているという。

謝辞

本稿作成にあたり飯高伸五氏 (日本学術振興会特別研究員・筑波大学) からコメントを頂きました。記して感謝いたします。

参考文献

- Kelly, John D. 2001 'Fiji: Journeys and Struggles' *The Journal of Pacific History* 36 (2): 257-262.
- Lal, Brij 1983a *Girmitiyas: The Origin of the Fiji Indians*. Canberra: The Journal of Pacific History.
- 1983b 'The Fiji General Election of 1982: The Tidal Wave that Never

- Came', *Journal of the Pacific History* 18 (2): 134-157.
- (ed.) 1986 *Politics in Fiji: Studies in Contemporary History*. Laie: Brigham Young University.
- 1988 *Power and Prejudice: Making of the Fiji Crisis*. Wellington: New Zealand Institute of International Affairs.
- 1992 *Broken Waves: A History of the Fiji Islands in the Twentieth Century*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 1993 'Kenneth L. Gillion, 1929-1992: An Appreciation', *Journal of the Pacific History* 28 (1): 93-96.
- and Peter Lamour (eds.) 1997a *Electoral Systems in Divided Societies: The Fiji Constitution Review*. Canberra: National Centre for Development Studies, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University
- 1997b *A Vision For Change: AD Patel and the Politics of Fiji*. Canberra: National Centre for Development Studies. The Australian National University.
- 1998a *Another Way: The Politics of Constitutional Reform in Post-Coup Fiji*. Canberra: Asia Pacific Press. The Australian National University.
- 1998b *Crossing the Kala Pani: A Documentary History of Indian Indenture in Fiji*. Canberra: Division of Pacific & Asian History, Research School of Pacific & Asian Studies, Australian National University.
- (ed.) 2000 *Fiji before the Storm: Elections and the Politics of Development*. Canberra: Asia Pacific Press. The Australian National University.
- 2000b *Chalo Jahaji: On a Journey through Indenture in Fiji*. Canberra: Asia Pacific Press. The Australian National University.
- 2001a *Mr Tulsi's Store: A Fijian Journey*. Canberra: Pandanus Books. The Australian National University.
- 2001b 'While the Gun is still Smoking: Witnessing Participant History' in Lal, Brij and Peter Hempenstall (eds.) *Pacific Lives, Pacific Places: Bursting Boundaries in Pacific History*. Canberra: Journal of Pacific History.
- 2003 'The Road to Mr. Tulsi's Store' *Meajin* 62 (4): 42-48.
- (ed.) 2004 *Bitter Sweet: The Indo-Fijian Experience*. Canberra: Pandanus Books. The Australian National University.
- 2005a *On the Other Side of Midnight: A Fijian Journey*. New Delhi:

- National Book Trust.
- 2005b 'Bahut Julum : Reflection on the Use of Fiji Hindi' *Fijian Studies : A Journal of Contemporary Fiji*. 3 (1) : 153-158.
- 2006a *Islands of Turmoil : Elections and Politics in Fiji*. Canberra : Asia Pacific Press. The Australian National University.
- 2006b *The Encyclopaedia of the Indian Diaspora*. Singapore : National University of Singapore.
- (ed.) 2006c *British Documents on the End of Empire, Series B Vol. 10, Fiji*. London : Institute for Commonwealth Studies in the University of London.
- 2006d 'Passage across the Sea : Indentured Labor to Fiji and from the Solomons', in Munro, Doug and Brij Lal (eds.) *Texts and Contexts*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- 2008a *A Time Bomb lies Buried : Fiji's Road to Independence, 1960-1970*. Canberra : ANU E press. The Australian National University.
- 2008b *Turnings : Fiji Factions*. Suva : Fiji Institute of Applied Studies.
- 2008c 'Telling the Life of A.D. Patel', in Lal, Brij and Vicki Luker (eds.) *Telling Pacific Lives : Prisms of Process*. Canberra : ANU E press. The Australian National University.
- , Munro, Doug and Edward Beechert (eds.) 1993 *Plantation Workers : Resistance and Accomodation*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- and Kate Fortune (eds.) 2000 *The Pacific Islands : An Encyclopedia*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- and Vicki Luker (eds.) 2008 *Telling Pacific Lives : Prisms of Process*. Canberra : ANU E press. The Australian National University.
- Mishra, Vijay (ed.) 1979 *Rama's Banishment : A Centenary Tribute to the Fiji Indians 1879-1979*. Auckland : Heinemann Educational Books.
- Moag, R. 1977 *Fiji Hindi : A Basic Course and Reference Grammar*. Canberra : Australian National University Press.
- Munro, Doug 1997 'Interview with Brij V. Lal : Historian of Indenture and of Contemporary Fiji', *Itinerario* 21 (2) : 16-27
- 2000 'Of Journeys and Transformations : Brij V. Lal and the Study of Girmit', in Brij Lal *Chalo Jahaji : On a Journey through Indenture in Fiji*. Canberra : Asia Pacific Press. The Australian National University : 1-23.

ギルミティヤから二重に追放された人々へ

- Reeves, Sir Paul, Vakatora, Tomasi and Brij Lal 1996 *The Fiji Islands: Towards a United Future: Report of the Fiji Constitution Review Commission 1996*. Suva: Government Printer.
- Scarr, Deryck 1979 'John Bates Thurston: Grand Panjandrum of the Pacific.' Deryck Scarr (ed.) *More Pacific Islands Portraits*. Canberra: Australian National University Press.
- 1980 *Ratu Sukuna: Soldier, Statesman, Man of Two Worlds*. London: Macmillan Education.
- 1984 *Fiji: A Short History*. Laie: Institute for Polynesian Studies.
- 1988 *Politics of Illusion: The Military Coups in Fiji*. Kensington: New South Wales University Press.
- Subramani (ed.) 1979 *Indo = Fijian Experience*. st. Lucia: University of Queensland Press.
- ラル・ブリッジ 2005 『『インド人ディアスポラ』と二重の追放』武者小路公秀 (編) 『ディアスポラを超えて——アジア太平洋の平和と人権』国際書院